週刊 武四郎

第46号
2019年（平成31年）2月20日（水）
発行・松阪市

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

始めも果ても知れぬ我身

蒐集家、好古家としての松浦武四郎さんに非常に影響を受けたといわれる人がいます。山中共古という人です。明治から昭和を生きた人で、牧師そしてのちには民俗学者として後世の時代の人たちに大きな影響を与えました。

この人が、武四郎さんのことを書き残した文章に次のようなものがあります。少し長いのですが、晩年の武四郎さんの旅の姿をよく伝えているので引用しましょう。

松浦老は、一年一度は旅行されしが、衣類は一切持たず、至る所にて知人の家に宿り居りて、新調さるゝも、木綿衣服のみ。古きは置き誰かにやり呉れと申され、田舎老父の旅行の如く、股引わらじ、天竺木綿の柿色の洋傘を杖とし、菅笠かぶりて、手提の皮箱を持たれ、大体人力にも乗られず、東海道を歩行されし。提かばんの内には、最も珍奇なる青ろうかん勾玉と、漢鏡の珍しき一品を入れられて諸方にて見せられ、然して地方地方の有志、考古家を集め、古物の小集をなされしことなり。

武四郎さんは泊めてくれたお礼に珍しい勾玉などを見せたりしました。今ほど情報網の発達していなかった当時、旅人のこうした情報は地方に住む人にとって、とても新鮮で刺激的なものだったことでしょう。

武四郎さんが晩年、小さな書斎として〈一畳敷〉を造った時、自分の人生を回顧して「われ若きより一つの行李を肩にし……」と書き残していますが、戦前から武四郎さんのことを研究していた横山健堂さんの記録によると、武四郎さんは十六歳で家出した時に肩にかついでいた竹行李を生涯使い続けたとあります。長年使い込まれて真っ黒に煤けた竹行李が松浦家には関東大震災後まで伝わっていたそうです。

そして、この一畳敷についての一文は、次のような言葉で締めくくられています。

「此の一筆もおぼつかな誰に問はまし、いかにして、始めも果ても知れぬ我身を」

武四郎さんも寄る年波には勝てないことを自覚していたのでしょうか。この一畳敷の床の間には、幕府御用の命を受けて蝦夷地を探索した時の『蝦夷地御用』という旗が飾られている写真が残されています。武四郎さんは晩年、この小さな書斎でどんなことに思いを馳せていたのでしょうか。

▲「蝦夷地御用」の旗が飾られている一畳敷の床の間。
『世界探検全集　日本探検』より

松浦武四郎（1818～1888）
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今の北海道）を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む6案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親〉と称される。

文・河治和香　装画・りんたろう　編集・細山田正人　デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！